

エレキ・ギターの練習はアンプで音を出そう！

# 練習でもサウンドに妥協したくない！ トーンにこだわるギタリストのための小型コンボ Marshall MG10CF

「練習用アンプでもロックなサウンドで弾きたい！」。そんなギタリストにはギター・アンプの王者、Marshallのコンパクト・モデル「MG10CF」があります。片手で持てるほどのコンパクト・サイズでありながら、ライブハウスやスタジオでもお馴染みのMarshallサウンドは健在。小さな音量やヘッドフォンでも迫力のサウンドで演奏を楽しむことができます。コントロールもシンプルなので、初めてのアンプとしてもピッタリです。

## 知っておきたいサウンド

昨今、いろいろなメーカーから様々なギター・アンプが発売されていますが、ギタリストならぜひとも知っておきたいのが、Marshallアンプのサウンドです。ライブハウスはもちろん、リハーサル・スタジオから軽音楽部の部室まで世界中で愛されているサウンドは、まさにエレキ・ギター・サウンドの代名詞です。

Marshallは1962年にボーカリストであり、ドラマーでもあったジム・マーシャル氏によって設立されたイギリスのブランドです。設立して間もない頃からリッチー・ブラックモア（ディープ・パープル）やビート・タウンゼント（ザ・フー）といった名だたるギタリストから高い評価を得ていました。

Marshallが打ち立てた功績は数知れませんが、その

中でも音を積極的に歪ませるドライブ・サウンドを確立した点は「ロック」という音楽ジャンルが成立する大きなファクターになったと言えます。Marshallが登場するまでは「ギターをいかに歪ませることなく、大きくできるか？」が重要とされていたようですが、「意図的に歪ませた音の方がカッコいい！」という概念を作り上げたのがMarshallと、Marshallのアンプを愛用していた当時の先鋭的なギタリストたちだったのです。ジミ・ヘンドリックスやリッチー・ブラックモア、エリック・クラプトン、ジミー・ペイジなど、ロック界のレジェンドたちの背中には、いつもMarshallのアンプがありました。

## 10WモデルのMG10CF

そんなギター・アンプの王道サウンドを小音量でも楽しむことができるのが、MG10CFというモデルです。10Wの出力は自宅はもちろん、部室でのパート練習には十分過ぎるほどの音量を出すことができます。

使い方もとても簡単です。チャンネルはクリーンとオーバー・ドライブの2チャンネルを搭載しており、スイッチで簡単に切り替えることができます。スイッチにはLEDが組み込まれており、クリーン・チャンネルが選択されている時には緑に、オーバードライブ・チャンネルを選択時は赤く点灯するので、目で見てすぐに確認できる点も便利です。

コントロール類はクリーン・チャンネルにはVOLUMEのみ、オーバードライブ・チャンネルにはVOLUMEと歪み量を調整するGAINつまみがあります。さらに、MG10CFにはCONTOUR（コンツアー）というユニークなつまみが用意されているのが特徴です。バンド練習で使うような大型アンプにはTREBLEやMIDDLE、BASSといったEQ（トーン）が付いていますが、これらは細かい音作りができる反面、イメージした音を作るにはコツも必要です。CONTOURは本来は3つのつまみで作っていくようなサウンドを、1つのつまみで作ることができるパラメーター。具体的には、数値を小さめに設定した時にはヘヴィメタルなどの激しいリフに最適なドンシャリ・サウンドに。反対に大きく設定していくと中域にハリのある、押し出し感のあるサウンドを作ることができます。このように、

たった3つのつまみだけでも非常に幅広いディストーション・サウンドを作ることができるのです。

## 無音練習もできる！

実際にギターを接続して音を出してみると、こんな小さいのにMarshallらしいロックなサウンドが飛び出してくることに驚くでしょう。クリーン・チャンネルは非常にハリがあってバランスの良いサウンドで、カッティングからアルペジオまで、どんなフレーズも気持ち良く演奏することができます。一方、オーバードライブ・チャンネルに切り替えるとサウンドは一変。現代的なディストーション・サウンドが楽しめます。GAINを上げていくとどんどん歪んでいくので、ハードロックまでなら歪み系のエフェクターがなくても十分です。

本体にはヘッドフォン端子があるので、イヤフォンなどを接続して使うこともできます。ヘッドフォン端子にケーブルを接続するとアンプからの音はカットされるので、無音での練習が可能です。ヘッドフォンでも迫力のあるサウンドを楽しむことができるので、自宅での夜間の練習にも最適です。同じく、オーディオAUX端子には音楽プレイヤーやメトロノームを接続して、好きな曲やクリック音を聴きながら演奏を楽しむことができます。

## 音作りのコツ

ここで、MG10CFの音作りのコツをいくつか紹介します。まずクリーン・サウンドを作る場合には、ギター側のボリュームとトーンを組み合わせることで音のイメージを調整していきます。MG10CFは非常にハリのあるサウンドなので、ダークな音が欲しい場合にはトーンを絞りにして使ってみましょう。また、エフェクターを組み合わせる時にはクリーン・チャンネルがオススメ。音にクセがないので、エフェクターの効果を生かした音作りができるでしょう。

歪み系サウンドの場合にキモとなるのは、CONTOURつまみです。先述の通り、数値を上げていくとミドルを強調したサウンドに、下げていくとドンシャ



Marshallのスタック・アンプは、まさにロックの代名詞！



リ・サウンドになるのですが、まずはつまみを12時の方向にセットするところから試してみてください。この設定がMarshallらしいベーシックなサウンドなので、その音を基準に調整していくイメージです。GAINやVOLUME、さらには使用するギターによっても印象は変わりますが、ゲインを下げめにしてクランチのように使う時にはCONTOURの量を大きめに。ゲインを上げていくならCONTOURを下げめに設定すると、定番のサウンドが作れるでしょう。

小さくてもMarshallらしいサウンドが味わえるのはロック好きなギタリストには堪らないはず。最近ではデジタル的にアンプに似た音を作り出すモデリング・アンプも増えてきていますが、MG10CFは部活での個人練習や自宅での練習に使いやすいサイズで、100%アナログならではの骨太なサウンドを楽しむことができる魅力的なモデルです。

Marshall MG10CF 価格：オープン

主な仕様 形式：ソリッド・ステート チャンネル数：2 (CLEAN/OD) 出力：10W 入力端子：ギター入力+AUXオーディオ入力 出力端子：ヘッドフォン出力 コントロール：VOLUME x 2、GAIN、CONTOUR スピーカー：1 x 6.5" 重量：4.8kg サイズ(W x H x D)：295 x 315 x 180

## MarshallのDNAを受け継いだアナログ・トーン、MGシリーズ

MGシリーズには、今回紹介した10WモデルのMG10CF以外にもいろいろなおサイズや機能を持った製品がラインアップされています。「MG2CFX」はシリーズ最小ボディの2W出力モデルで、コーラス、フェイザー、フランジャー、リバブ、ディレイといったデジタル・エフェクターやチューナーを内蔵。作成した音を保存できるプログラミング機能も備えたコンパクトな本格アンプです。もちろんAUX入力やヘッドフォン端子も搭載しているので、気軽に持ち運んで使いたい人にピッタリなモデルと言えます。

15W出力の「MG15CF」はBASS、MIDDLE、TREBLEの3バンドEQを搭載し、多彩なトーン・コントロールに対応しています。なお、MG15CFにはスプリング・リバブを追加した「MG15CFR」、デジタル・エフェクトや従来では高級モデルでしか実現できていなかった、各つまみの設定を保存できるプログラマブル機能を盛り込んだ「MG15CFX」といったバリエーション・モデルも用意されています。

ここから先の上位モデルは出力の違いで、30W出力の「MG30CFX」、50Wの「MG50CFX」、100Wの「MG101CFX」、100W出力で2発のスピーカーを搭載した「MG102CFX」などがラインアップ。また、スタック・タイプでも15Wの「MG15CFXMS」、100Wの「MG100HCFX」の2種類が用意されています。

モデルを選ぶ際には、まずどのような用途で使うのかを考えましょう。自宅でするには10W～15Wもあれば十分です。次にエフェクト機能が必要かどうか、です。コンパクト・エフェクターを持っているか、というよりもアンプ側にエフェクトを内蔵したモデルであれば、ギターをつなぐだけで様々な音が作れるという手軽さが魅力です。歪みに関しては、MGシリーズはアンプ単体でもかなり歪むので、ディレイやコーラスなどを使うかどうかポイントになるでしょう。モデル名に「CFX」が付いたモデルの場合はつまみやエフェクトの設定をプリセットとして保存し、すぐに呼び出すことができるので、いろいろな音を切り替えながら演奏したい時に便利です。



30W以上になると部活でのバンド練習に最適で、100Wもあればライブ用途にも十分に対応できます。MGシリーズには合計11種類の製品がラインアップされているので、用途にピッタリのアンプが選べます。